論考

日本語で外国人と付き合う

長田恵子
（日本語教師）

皆さんは「日本語学校」をご存じですか。日本に来る留学生の中で、日本語力のある人は直接大学や専門学校に入りますが、日本語自体をまず勉強したいと考える人は、日本語学校か大学の日本語別科に入ります。２０１９年度のデータによると、全国で７７４の機関があり、約９万人余りの外国人が日本語を学んでいます。近年日本のアニメやゲームなどのポップカルチャーが有名になるにつれ、留学生も増えてきました。私は大学の専門は児童学で、初めは幼稚園で働いていましたが、第二の仕事として全く畑違いの日本語教師を選び、20年以上東京の日本語学校で非常勤として働いています。

日本語学校の授業の初日は、どんなにベテランでも、どんなに上手な先生でも緊張し、ドキドキしながら教室に入ります。特に新入生のクラスは、世界各地から「日本に来たくてたまらなかった、やっと来られたよ！」というような顔をした学生たちが、期待に満ちた目で私たちを待ち構えているからです。「こんにちは！」「初めまして！」。私たちは媒介語なしの直接法で日本語を教えていきます。ここは、日本に居ながらにして世界各地の人と出会える、本当にすてきな場所なんです。

授業中は、あちこちの教室から大きな笑い

長田恵子（おさだ けいこ）
東京都出身。1996年からインターカルト日本語学校にて
非常勤講師を務める。

声や拍手、「えーっ？」と驚いたような声が聞こえてきます。「勉強は面白い」「学校が楽しい」、こんな声がよく聞かれます。全然話せなかったのに、毎日少しずつ言葉や表現を覚え、言いたいことが言えるようになる、自分の話が通じ、相手の話がわかる、そして、さまざまな国のことを知る……毎日が驚きと発見と喜びに満ちています。教え方は、対話の形で導入し、日本語教育独自の文法で教え、ペアやグループで話させたり、ゲームをさせたりで準備も大変です。また、話の展開に臨機応変に対応し進めていくので、難しさとやりがい、そして楽しさも満載の仕事だと思います。

私がこの仕事を始めた1996年頃は、日本の経済力に魅かれて、アジアからの留学生が数多くいました。日本で先進技術を学び、帰国後は国の発展に貢献したいという若者たちでした。その頃授業の中で聞いた話です。ある韓国人の男性は、徴兵され軍隊にいたとき、北朝鮮との国境警備の任務に就き、真夜中の寒さの中、ふと見上げた空の、満天の星が美しかったと。また、ある台湾の学生は、やはり軍隊で、汚泥の川の中を泳がされ、皆腹痛を起こした話を、またあるスリランカ人の学生は、高校の遠足で、象たちが川へ水を飲みに来たのを木立に隠れて見たときの興奮を話してくれました。自分では経験できない話にみんなで聞き入ったのを覚えています。

秋の季節には教室を飛び出し、当時近くにあった神宮外苑へ、イチョウを見に出かけたことがありました。黄金色の世界の中を、イチョウの落ち葉を舞い上げながら学生たちと弾むように歩いた経験も忘れられません。飲み会をしたり、一緒に阿波踊りや花火を見たり、自宅に呼んでバーベキューをしたりと、授業以外での交流の思い出も、私の心の大切な宝物となっています。

その後、学校は秋葉原の近くに移転し、学校の方針で多国籍の学生たちが来校するよう

になりました。しかし、２０１１年に起きた東日本大震災と原発事故の影響で、ほとんどの学生が帰国してしまい、状況は一変しました。それでもしばらくして落ち着くと、学生たちは徐々に戻ってきてくれました。

その頃日本のアニメやゲーム、ファッション、和食などの人気が世界的にも高まり、観光客も留学生も増えてきました。秋葉原という地の利もあり、外国人のオタクの人たちも多く来ました。あるスウェーデン人は「オレ様は～」みたいな話し方をするし、別の学生は、アニメの中の決めゼリフをすらすらと言うし、メイドカフェへ行ったという話題もよく出ました。一方で、祭りや花火のように伝統文化を守っている日本人の姿に感動する学生も多くいます。熱烈な相撲ファンになって、必ず国技館へ足を運び、みそ汁と納豆を食べていたアメリカの学生、戦国史が大好きで、大学の史学科に入ったロシア人、日帰り旅行の日光江戸村へは着物を着て行くという意気込みのベトナムや南米の学生など、日本にハマる学生も結構います。

よく学生たちに「あなたにとって、大切なものは何？」と聞くと、迷わず多くの学生が「家族」「友人」と答えます。昔も今も変わりません。私たちは、今でこそ大きな天災や新型コロナウイルス感染症の世界的流行を経験して、家族や友人、何気ない日常の生活がいかに貴重であるかを体感していますが、以前は成功や目標達成などが大切だと思っていた人も多かったと思います。しかし、外国の人たちは、ずっとぶれていません。そして大切なのは家族だけではなく、困っている人を見たら、手助けをする、それは当たり前のことと考えています。「先生、道でおじいさんが倒れているのに、日本人は誰も助けてあげません。なぜですか？」と驚いているイタリア人がいました。恥ずかしいです。また「電車の中で乗ってきた老人に席を譲ったら、逆に怒られたんです」としょげている中国の学生も

いました。悲しいです。彼らにとって当たり前のこと、人間としての基本的な思いやりを教えられます。本当に心優しい人たちです。また、成績が伸びなくても諦めず、一途に明るく努力して夢を実現させた学生たちもいて、私は彼らを心から応援するとともに尊敬し、自分もそうしなければと励まされています。

私たちの学校では年に1回、スピーチ大会が行われます。もちろん日本での心に残った経験を話す学生も多いですが、疑問を投げかける学生もいます。なぜ日本では、銀行の窓口へ行かなければならない？　まだ紙の通帳なんて使っているの？　中国ではお年玉のやり取りも、ホームレスにあげるお金さえ電子マネーでできるのに、なぜ日本では現金？「#KuToo運動」を知って、こんな男女差別があるなら、日本で働きたくないと怒る学生など、批判もたくさん出てきます。春の新型コロナウイルス感染拡大のときも、日本の対策は甘すぎると怒っている台湾の学生がいました。留学生は日本が大好きですが、批判もきちんとしてくれます。私たちが気づかない良いところも悪いところも教えてくれます。

今後日本に住む外国人も増え、多文化共生社会へ移行していくでしょう。私が今まで、何百人かの外国人学生と日本語で付き合ってきて言えることは、日本人も外国人も同じ人間として、根底は何も変わらない、ただ一人ひとり個性が違うだけということです。外見の違いも個性に過ぎません。日本に住みたい人に日本語教育の機会がきちんと与えられれば、私たちは日本語で楽しくお付き合いできます。ある学生が初めて日本に来たとき、神戸でおばあさんに「おはようございます」と言われてとてもうれしかったと話していました。もし、皆さんの近くに外国人がいたら、ぜひ気軽に日本語で声をかけてみてください。そこから世界は広がるでしょう。